

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No.9 CONTENTS

About dish of the ltaji ware excavated from the Maehara Site
Egami Megumi

Tateno (Hiyamizu) kilns excavated White Satsumafor the age of “stamped product”
Department to investigate the south of the Jomon

《Result of the outside document investigation》

Manufacturing Techniques and Variability: Incipient Jomon Pottery from the Sankakuyama
I Site, Kagoshima, Japan
Fumie Iizuka, Masami Izuho, Pamela Vandiver, and Koji Okubo

《Materials of Archaeological Research》

The collection such as ancient baked salt earthenware vesselsand some consideration
Makoto Uwatoko

《Document collection》

Assembly of earthen earrings of Kagoshima Prefecture excavated
Department to investigate the south of the Jomon

Annual of Kagoshima Prefectual Archaeological Center of the 27th year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
December 2016

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第9号

前原遺跡で出土した土師器の坏について
— 九州中部の出土状況をもとに —
江神 めぐみ

豎野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品の年代観
南の縄文調査室

《外部資料調査の成果から》

鹿児島県中種子町三角山 I 遺跡出土
縄文草創期土器の成形技術とその変異性の研究
飯塚文枝, 出穂雅実, パメラ・バンディバー, 大久保浩二

《資料紹介》

鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き
上床 真

《資料集成》

鹿児島県内の耳栓状土製品集成
南の縄文調査室

平成 27 年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2016. 12

研究紀要・年報

縄文の森から

第9号

二〇一六 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』 第9号 目 次

前原遺跡で出土した土師器の坏について

— 九州中部の出土状況をもとに —

江神 めぐみ 1

堅野（冷水）窯跡出土の白薩摩型打ち製品の年代観

南の縄文室調査 . . . 13

《外部資料調査の成果から》

鹿児島県中種子町三角山Ⅰ遺跡出土縄文草創期土器の成形技術とその変異性の研究

飯塚 文枝，出穂 雅実，パメラ・バンディバー，大久保 浩二
. . . . 31

《資料紹介》

鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き

上床 真 51

《資料集成》

鹿児島県内の耳栓状土製品集成

南の縄文調査室 . . . 61

平成27年度年報 65

鹿児島県出土の古代の焼塩土器等に関する覚え書き

上床 真

The collection such as ancient (nara-heian period) baked salt earthenware vessels and some consideration

Uwatoko Makoto

要旨

近年資料数が増加している「焼塩土器」について集成し若干の検討を行った。その結果、薩摩地域よりも大隅地域での出土数が多いことを再確認した。また、いくつかの課題についての指摘を行った。

キーワード 古代（8～10世紀） 集落 焼塩土器 紡錘車 土鍾

1 はじめに

古代¹⁾の遺跡において、近年になって「塩」の生産・流通に関わる遺物である「焼塩土器」²⁾の事例が増加している。そこで、集落等の遺跡において発見される遺物の中でも重要な意味合いを持つことが推察される「焼塩土器」について集成し若干の検討を行う。

2 研究略史

以下にそれぞれの鹿児島県内の資料を中心とした研究の略史を述べる³⁾。

(1) 発掘調査報告書

鹿児島県内で出土する「砲弾形で内面に布目痕のある土器」については、以前は「焼塩壺」と呼称されていたが、形状が壺形ではないことから、近年は「焼塩土器」とするようになっている⁴⁾。

全国的には、「塩」に関する土器を一括し、その中で用途を「焼塩」に限ったものだけを「焼塩土器」とする傾向がある。ここでは特に断らない限り、「焼塩土器」として統一したい。

なぜなら、県内においては製塩遺跡も明確な製塩土器も確認されていないからである。

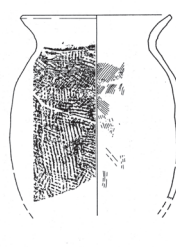
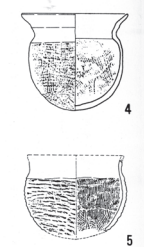
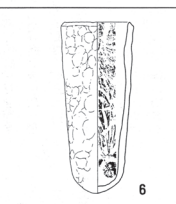
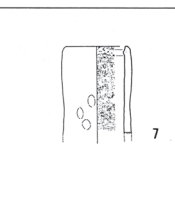
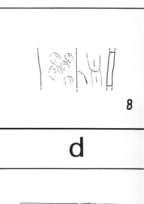
池畑耕一によれば、1981・1982年に発掘調査された成岡・西ノ平遺跡で初めて「焼塩土器」の出土が確認されている（池畑1994）。また、成岡・西ノ平遺跡の報告書での扱いをみると、「布痕土器」として記載されている。この後、1990年代前半までは「焼塩壺」とされているが（小中原遺跡・榎崎A遺跡等）、2000年代に入ってからほぼ「焼塩土器」とされるようになった。

(2) 研究⁵⁾

近藤義郎は、鹿児島県や宮崎県で出土する「内面布痕の焼き塩用土器」を取り上げ、「焼き塩用と考えられるほか、性質の究明はなお十分なされていない」と指摘した（近藤1980）。

森田勉は、九州における焼塩土器の検討を行っている（森田1983）が、ここでは以下の2点について注目する。①焼塩壺は内陸深くまで出土し、運搬具としての機能を荷なっていたことが知れた。出土分布をみると無秩序な在り方は示さず、官道沿いに集中する特質を有している。焼塩壺の分布から官道の復元も可能となり得よう。

②焼塩壺は8世紀代に出現し、9世紀中頃になるとその姿を遺構上から消す。同時に玄界灘式製塩土器も徐々に

	a	b	c
I 類			
II 類			
III 類			
IV 類			
V 類			
遺跡名	1. 御笠地区遺跡群 6・10・14・18. 浜田遺跡 9. 吉塚本町遺跡 15. 乙原天道町遺跡	2・3・5. 海の中道遺跡 7. 仲島遺跡 11. 筑後国府跡 16. 上清水遺跡	4. 多々良込田遺跡 8. 松丸B遺跡 12. 陣ノ内遺跡 13. 博多遺跡群 17. 塔ノ上遺跡

第1図 製塩土器焼塩土器分類図
（小田1996から引用）

数量を減じ、10世紀代になると土器製塩から塩浜製塩へと移行していったことを海の中道遺跡が物語っている。

この意見に対して、小田和利は焼塩土器を含む「製塩土器は官衙的遺物に値しない」として、官衙のみならず集落遺跡からの出土も多いことを明らかにした（小田1996）。

池畑耕一は、官衙的遺物の中のひとつとして、焼塩壺を取り上げ、出土遺跡を一覧表に示している（池畑1983・1986ほか）。また、「鹿児島県・宮崎県・沖縄県」の様相についてまとめ、考察を行っている（池畑1994）。その結果、「役所など拠点的な遺跡から出土する傾向があること」「奄美諸島・沖縄での出土例が認められ、沖縄本島南部が最南端出土例になること」「時期はおおむね9世紀～10世紀頃に比定されること」などを指摘した。

その後、焼塩土器・製塩土器等の研究はほとんどみられなくなるが、廣栄次が県内出土土器の集成を行ったうえで、海の中道遺跡（福岡県）で製塩土器Ⅰ類として分類された「外面に叩き目を有する土師質の甕形土器」に類似する土器が県内各地にも存在することを指摘している（廣2013）。近年の研究の中では注目される重要な指摘である。

以上、南部九州の研究略史について述べた。以下では、焼塩土器などについての若干の検討を行う。

3 焼塩土器について

研究史でも述べたが、県内各地で出土する焼塩土器は、基本的に砲弾形で内面に布目痕のある土器である。全国的な視野でみた場合、形状としては非常に特徴的なものといえる（第1図、第2図）。用途としては、基本的に、塩を運ぶための容器であり、保存するものでもある。中に詰められた塩を使用する際には、容器ごと火にかけて水分を飛ばした後に塩を取り出す⁶⁾。その後、容器としての焼塩土器は廃棄されてその役目を終える。これには

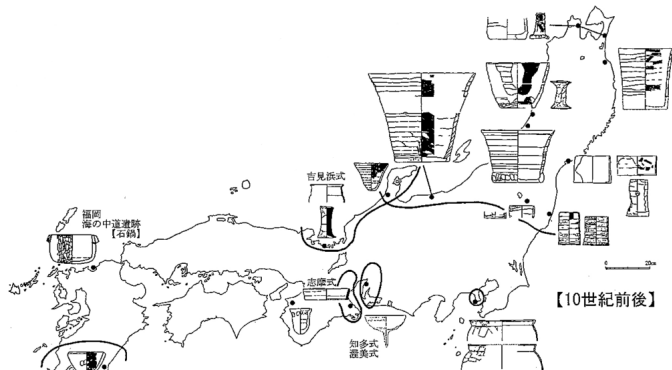
異論もある。例えば、森泰通は「焼塩土器」とされているものについて、「焼塩」に伴うものではなく、製塩の一連の作業の工程に用いられた土器であった可能性を提示している（森2010）。

出土状況に目を向けると、例えば高篠遺跡（曾於市）では、焼土（軽石集積含む）の周囲で大量の焼塩土器が出土しており、焼塩土器の使用法について重要な成果といえる。

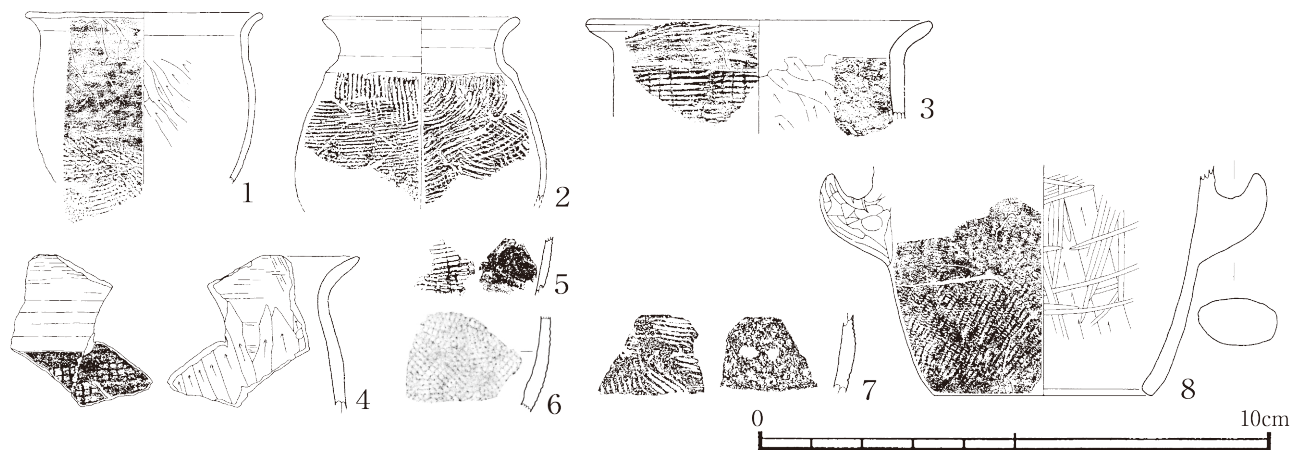
また、山野原遺跡（南さつま市）のものは、県内においては比較的大型のものであり、特徴的である。大隅地域で出土している焼塩土器の特徴として「自然釉が付着しているものが散見される」という点がある。今回は全ての遺物を実見できていないが、松ヶ尾遺跡（志布志市）・財部城ヶ尾遺跡（曾於市）などにおいて確認されているので、日向国近辺での現象の可能性もある。

平安時代においては、薩摩国は塩の貢納国である。『延喜式』巻24主計寮上巻では薩摩における「調」として「塩」三石三斗が記載されている（黒板・国史大系編修会編1959）。

一方、大隅国は特産とはなっていないが、焼塩土器の出土例は多い。従来から、大隅地方（特に曾於市周辺）における焼塩土器の出土例の多さについては指摘されている（池畑1994）が、その事実は第3表からも確認できる。表中にも示しているが、旧日向国と大隅国⁷⁾に

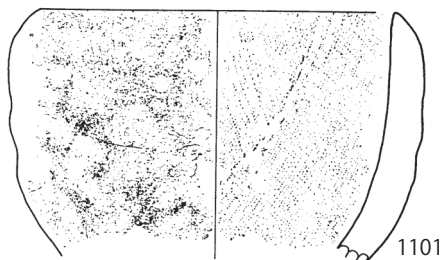


第2図 製塩土器の地域色
(森2010から引用)

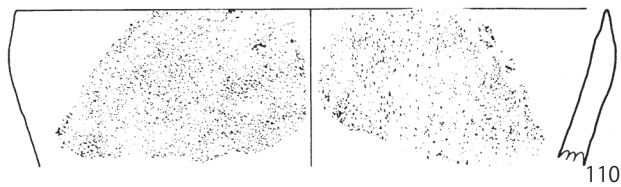


第3図 外面にタタキ痕をもつ土師器
(廣2013から引用)

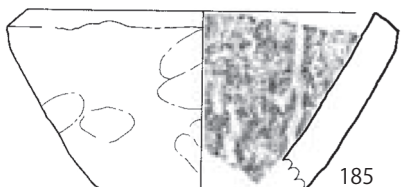
海の中道遺跡 (1) 外畠遺跡 (2) 大島遺跡 (3・8)
筆付遺跡 (4) 堀川遺跡 (5) 西ノ平遺跡 (6) 小崗遺跡 (7)



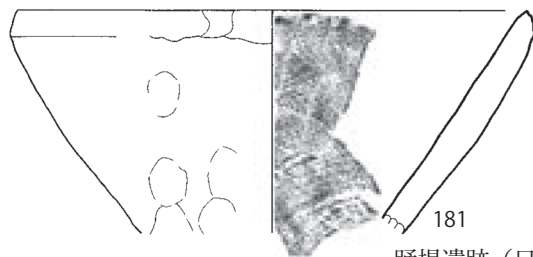
小中原遺跡（薩摩）



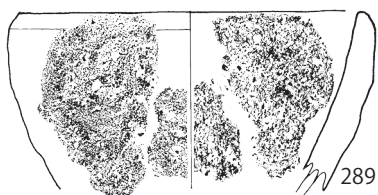
小中原遺跡（薩摩）



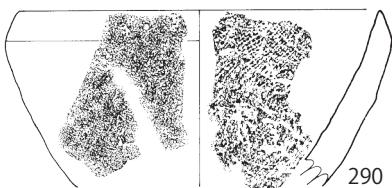
踊場遺跡（日向）



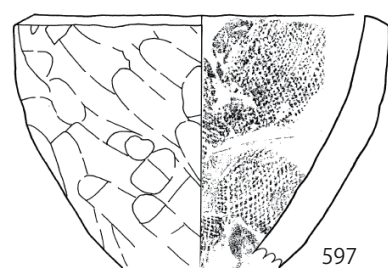
踊場遺跡（日向）



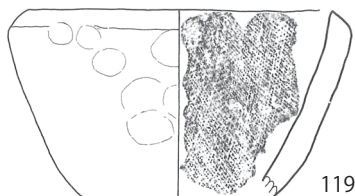
唐尾遺跡（日向）



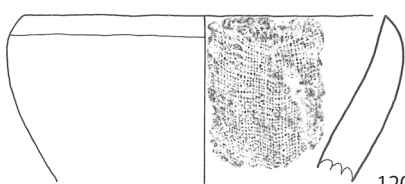
唐尾遺跡（日向）



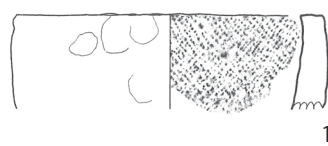
狩俣遺跡（大隅）



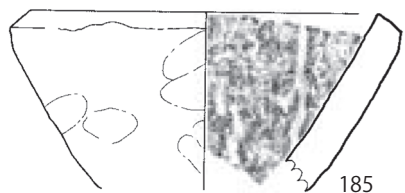
財部城ヶ尾遺跡（日向）



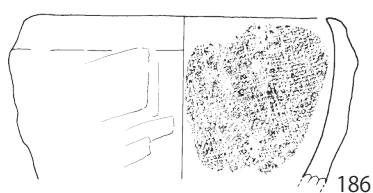
財部城ヶ尾遺跡（日向）



財部城ヶ尾遺跡（日向）



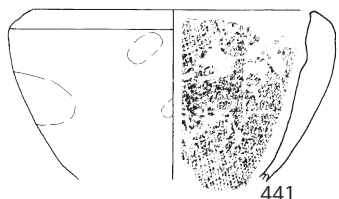
天神段遺跡（日向）



天神段遺跡（日向）



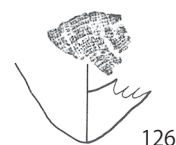
天神段遺跡（日向）



関山西遺跡（日向）



踊場遺跡（日向）



財部城ヶ尾遺跡（日向）



(S=1/3)

第3表 焼塩土器等(含紡錘車・鞆羽口等)出土地名表

No.	国	遺 跡 名	所 在 地	立 地	紡錘車	鞆羽口	備 考	報告書・初出文献	
1	薩摩国	川上城	鹿児島市川上町字加栗山	台地縁辺部	○	○	方形土坑5(竪穴遺構)から出土	埋せ2013(176)	
2		上加世田	南さつま市川畑字上加世田	台地縁辺部	鉄製	○	土鍾・鉄製紡錘車	市1985(3)	
3		松木園	南さつま市金峰町尾下字松木園ほか	台地	—	—	竪穴遺構	池畑1991	
4		山野原	南さつま市金峰町尾下字山野原	台地縁辺部	—	—	土鍾	町1995(7)	
5		筆付	南さつま市金峰町尾下字筆付	沖積地・微高地	—	—		町2004(17)	
6		持鉢松	南さつま市金峰町宮崎字持鉢松	河川自然堤防上	○	○	鉄製紡錘車	埋せ2007(120)	
7		小園	南さつま市金峰町大字浦之名字小園	河岸段丘	—	○	土鍾・羽口は中世か	町2000(11)	
8		小中原	南さつま市金峰町新山字小中原	台地上	○	—	鉄製紡錘車・土鍾・巡方・砥石・土器焼成窯	県1991(57)	
9		成岡	薩摩川内市中福良町字成岡	台地上	○	○	竪穴遺構	県1983(28)	
10		西ノ平	薩摩川内市中福良町字西ノ平	台地上	○	○	竪穴遺構・土鍾・銅製帯金具(巡方)・銅碗	県1983(28)	
11		鍛冶屋馬場	薩摩川内市平佐町字鍛冶屋馬場	微高地	鉄製	○	10C中葉・鉄製紡錘車	埋せ2002(39)	
12		京田	薩摩川内市中郷町字京田	沖積地・微高地	木製	—	木製紡錘車	埋せ2005(81)	
13		大島	薩摩川内市東小路町	自然堤防上	○	○	掘立柱建物・土鍾	埋せ2005(80)	
14		麦之浦貝塚	薩摩川内市陽成町字後迫	舌状台地縁辺部	—	—	掘立柱建物・越州窯系青磁・布目瓦	市土地開発公社1987	
15		司野下	薩摩川内市東郷町斧刈字司野下	舌状台地縁辺部	—	—	土鍾	市2011(8)	
16		辻堂(山下)	阿久根市波留字辻堂(及び山下地区)	台地	—	—	採集遺物	池畑1991	
17		尾崎B	出水市文化町字横尾	河岸段丘先端部	○	—	土鍾・墨書土器「厨」	市1996(6)	
18		外畠	出水市荘上字外畠	扇状地扇端部	○	—	掘立柱建物・青銅製品・刀子	県2012(175)	
19		大畠	出水市野田町下名字大畠	台地縁辺部	石製	○	石製紡錘車・移動式カマド・坩堝(取瓶)	町2006	
20		大坪	出水市美原町字大坪・見入来・榎木田	沖積地・微高地	○	○	土鍾	埋せ2005(79)	
21		市ノ原 第1地点	日置市東市来町湯田・市来町大里	台地縁辺部	○	○	掘立柱建物(含四面廂)・鉄製紡錘車	埋せ2003(49)	
22		犬ヶ原	日置市東市来町伊作田犬ヶ原	台地	○	○	11～12世紀・鉄製紡錘車・竪穴遺構	埋せ2003(50)	
23		栴城跡	いちき串木野市上名字門前・栴鼻・大堂庵	台地	○	○	低地部から出土。木製紡錘車未製品	埋せ2010(155)	
24		小倉畑	始良市西餅田字小倉畑	沖積地・微高地	鉄製	○	土鍾・鉄製紡錘車・周溝墓	埋せ2002(34)	
25		森	始良市西餅田字森	沖積台地	○	—	周溝墓	埋せ2003(55)	
26		柳方迫	始良市船津字柳方迫	舌状台地縁辺部	○	○	土鍾・石帯(丸軋)・瓦鉢・移動式カマド・竪穴遺構	市2011(1)	
27		高井田	始良市加治木町木田字高井田	低地	○	—	掘立柱建物	埋せ2002(35)	
28		竹牟礼	始良市蒲生町漆字竹牟礼	台地	○	○	掘立柱建物	町1995(3)	
29		曲迫	霧島市溝辺町麓字曲迫	台地	○	—	移動式カマド	埋せ2004(64)	
30	北麓原D	霧島市溝辺町麓字横大道	台地	○	○	掘立柱建物・土鍾	埋せ2011(168)		
31	中尾立	霧島市福山町福沢字中尾立	台地	○	—	掘立柱建物	町1994(2)		
32	藤兵衛坂段	霧島市福山町福沢字藤兵衛坂段	台地	○	—	土鍾	町1997(3)		
33	笠木	曾於市大隅町中之内字笠木	台地	—	—		市2005(1)		
34	高古塚	曾於市大隅町岩川字高古塚	台地	○	—	鉄滓あり	埋せ2008(127)		
35	建山	曾於市大隅町岩川字屋敷段	台地	—	—	掘立柱建物(含四面廂)・軽石製品	埋せ2009(139)		
36	大隅国	狩俣	曾於市大隅町岩川字狩俣	台地	○	—	掘立柱建物・軽石製品	埋せ2010(152)	
37		西原段Ⅰ	曾於市大隅町中之内字窩ノ尾・堤ノ迫・荒神ノ迫	台地	—	—		埋せ2009(139)	
38		西原段Ⅱ	曾於市大隅町中之内字西原段	台地	○	—	墨書土器「酒」・「伴」	町1997(12)	
39		吹切段	曾於市大隅町中之内字桂岩川菅牟田	台地	—	—		町2000(21)	
40		萩原	曾於市大隅町中之内字萩原	台地	○	—		町2003(31)	
41		中迫Ⅱ	曾於市大隅町岩川字中迫	台地	—	—		町2005(39)	
42		下曾原	曾於市大隅町坂元字下曾原	台地縁辺部	—	—	分布調査	県1984(29)	
43		鳥居ヶ段	鹿屋市輝北町平房字鳥居ヶ段	台地縁辺部	○	—	竪穴遺構	町1998(1)	
44		吉元	鹿屋市輝北町下百引字吉元	微高地	—	—		町2005(2)	
45		宮の脇	鹿屋市花岡町字宮ノ脇	台地縁辺部	—	○	銅製帯金具(丸軋)	市1986(4)	
46		松山田西(根木原A)	鹿屋市根木原町字松山田西	台地縁辺部	—	—		埋せ2004(76)	
47		榎崎A	鹿屋市郷ノ原町榎崎	台地縁辺部	○	—	炉跡・道路状遺構・砥石	県1992(63)	
48		花牟礼(大戸原)	肝付町新富花牟礼字大戸原	台地	—	—		町1984(1)	
49		永野原	肝付町後田字永野	台地	○	○	ずん胴形の製塩?土器あり	町2000(7)	
50		上松原汐入	熊毛郡南種子町茎永字上松原汐入	平地	—	—	(旧多祢国)分布調査	県1993(66)	
51		日向国	井出間	志布志市松山町新橋字井出間	台地	○	—		町1989(3)
52			砂田	志布志市松山町新橋字砂田	台地縁辺部	—	—	分布調査	県1984(29)
53			野久尾	志布志市志布志町帖字野首	台地	—	○		町1979(2)
54			鎌石	志布志市志布志町帖字鎌石	台地	—	○		町1990(16)
55			稲荷迫	志布志市志布志町安楽字稲荷迫	台地	○	○		埋せ2012(169)
56			仕明	志布志市有明町蓬原字仕明	台地	—	○	羽口は古墳時代か?	町2005(7) 2005(11)
57	松ヶ尾		志布志市有明町伊崎田字松ヶ尾	台地	—	—	自然釉がかかるものあり	埋せ2007(109)	
58	天神段		曾於郡大崎町野方字天神段	台地	○	○	土鍾・竪穴遺構・鍛冶関連遺構	県・公財2015(3)	
59	永吉天神段		曾於郡大崎町永吉字天神段	台地	—	○		調査中	
60	関山西		曾於市末吉町諏訪方字関山西	台地	—	○		埋せ2008(126)	
61	唐尾		曾於市末吉町諏訪方字唐尾	台地	○	○	軽石集積	埋せ2008(127)	
62	上ノ原		曾於市末吉町諏訪方字上ノ原	台地	—	—		町1997(16)	
63	塚ノ段		曾於市末吉町諏訪方字塚ノ段	台地	—	—		町2001(22)	
64	上中段		曾於市末吉町深川字上中段	台地縁辺部	—	○		町1986(4)	
65	楠木岡		曾於市末吉町深川字楠木岡	台地	—	—		町1987(5)	
66	井手ノ上		曾於市末吉町深川字柿木	台地	○	—		町1989(8) 1991(11)	
67	チサノ木		曾於市末吉町南之郷字橋野	台地	—	—	土坑墓・周溝墓・鉄滓	市2009(9)	
68	久保崎Ⅳ		曾於市大隅町月野字上段	台地	—	—		町2003(32)	
69	広津田城Ⅱ		曾於市大隅町月野字広津田	台地	軽石製	—	軽石製品紡錘車(穴5つ)・石帯(巡方)	町2005(41)	
70	高塚B		曾於市財部町下財部字高塚	台地縁辺部	—	—	分布調査	県1984(29)	
71	田平下		曾於市財部町下財部字田平下	台地	—	—	建物	町2002(6)	
72	片蓋下		曾於市財部町片蓋字片蓋下	台地	○	—	土鍾	市2008(6)	
73	野方		曾於市財部町南俣字野方	台地縁辺部	—	—	分布調査	県1984(29)	
74	高篠		曾於市財部町南俣字高篠	台地	○	○	鉄製紡錘車・軽石集積・鉄滓・巡方	埋せ2004(71)	
75	踊場		曾於市財部町南俣字踊場	台地	○	○	土鍾・鉄滓	埋せ2004(71)	
76	長十塚		曾於市財部町南俣字長十塚	台地	—	—	土鍾	町1987(1)	
77	財部城ヶ尾		曾於市財部町南俣字長十塚	台地	○	—	火葬墓(蔵骨器)	埋せ2005(90)	
				計	40	29			

焼塩土器のみの出土: 27 焼塩土器と紡錘車: 22 焼塩土器と羽口: 9 焼塩土器とどちらか: 27 焼塩土器・紡錘車・羽口がそろったもの: 22

分けてみると、旧日向国が占める面積が少ないにも関わらず両者はほぼ同数となっている。このことから曾於市周辺における焼塩土器の出土数の多さが示されている⁸⁾。

ただし、県内における焼塩土器の各出土遺跡における、焼塩土器そのものを実見してみると、意外な結果がみられた。薩摩国・大隅国の焼塩土器は残存状況が良好でなく、小中原遺跡（南さつま市）以外には完形の状態を復元できるものがなかった。これに対して、鹿児島県内における旧日向国内の焼塩土器出土遺跡の焼塩土器は、比較的良好な残存状況であり、完形の状態を復元できるものが一定量みられる。

この事実から、薩摩国・大隅国と日向国では焼塩土器の消費のありかたが異なっていた可能性がある⁹⁾。

次に、大隅国及び日向国における出土地はその多くが、海に面していないいわゆる「内陸」である。明らかに「生産地」ではなく「消費地」であるが、その運搬・流通に関しては、「駅路」や「牧」などに関係する可能性が指摘されている（池畑 1993・県埋セ 2004 など）¹⁰⁾。

ただし、①牧が存在する地域から出土がないこと②出土分布に明らかな偏りがみられること③焼塩土器の出土量からみた場合、到底生活に必要な塩の量を満たしているとは思えないこと。そして必ずしも塩が焼塩土器に入られていたとは考えられないこと④文献に「籠」に入れた塩がみられることなどの指摘（奈文研 2013）がある。上記の4点の指摘のうち特に①については、全国的に「牧」における「焼塩土器」の出土数の少なさを指摘するものであるので重要である。

また、④については、考古学的に検証できないものである「塩俵」や「籠」のようなものに入れて運搬されている場合が基本で、焼塩土器で運搬される塩は少数であったという考え方が共通意見となりつつある（馬場 2013・佐々木 2014）。そうであるならば、なおさら焼塩土器内の塩の意義が問われることとなるが、この問題は今後の課題としておきたい。

この他の問題として、焼塩土器（及びその中にあったはずの「塩」）の生産地が明らかでないということがあげられる。この問題については、近藤義郎が指摘しており、やはり現状では明らかにすることが困難であることを以下のように述べている（近藤 1994）。

「製塩土器が見られない大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県などにおける焼塩土器の存在については、玄界灘式製塩土器が活躍していた福岡方面からの塩を詰めた搬入品ととらえるべきか、土器製塩と違った方法によって各地ごとに採取した塩を詰めた焼塩土器とすべきかの判断は難しい。」

また、池畑耕一は、辻堂原遺跡（日置市）と萩原遺跡（始良市）で「製塩土器」が出土していることを指摘してい

るが、「この遺跡自体を製塩遺跡とすることはとうてい不可能であり、これら土器が果たして製塩土器であるかどうかは決め手を欠く。あるいは実際の製塩をする場所はまだ少し海岸寄り、吹上浜の場合は砂丘の下に隠れている可能性もあるか」としており、やはり生産地等の特定が困難であると述べている（池畑 1994）。一つの問題としては、焼塩土器に塩を詰めたとみられる場所である「海浜」や「臨海地区」¹¹⁾などが開発される機会がほとんどなく、埋蔵文化財の調査対象地になる場合が少ないということもあるのではないかと考える。

4 焼塩土器とその他の遺物について

ところで、各報告書において焼塩土器の出土遺跡をたどっている際に、ふと気づいたことがあった。それは、同一遺跡から紡錘車とふいごの羽口が発見されている例が少なくないということであった。

また、上記の2種の遺物に比較すると、若干少ない印象があるが、併せて土鍾も発見されている例があるということも気づいた点である。

以上の点については、第3表から明らかである。これらの遺跡は、官衙の可能性が指摘される遺跡もあれば、堅穴住居跡のみしか発見されていない一般集落的な遺跡もあり、一見すると混在しているような印象を受ける。

その意味するところについては、筆者は意見を持ち合わせてはいないが、現段階においては遺跡の多様性としてとらえておきたい¹²⁾。

5 おわりに

今回は、「焼塩土器」について、思うところを雑駁に書き連ねてみた。以下に課題をまとめる。

(1) 出土傾向・分布などから

大隅地域に多く、薩摩地域に少ないという指摘が以前からなされているが、現状でもあまり大きな変化はない。ただし、塩の貢納国である薩摩に焼塩土器の出土数が少ないのはなぜかについては今後の課題である。

(2) 土器そのものから

焼塩土器については、「塩の運搬具兼調理具」という見方が多いが、一部にはまだ製塩土器というみかたも残る。また、これとは別に製塩土器の可能性があるという指摘のある土器も存在する。

少ない試料では断定はできないが「製塩土器」の可能性のある土器（焼塩土器・外面に叩き目を有する甕形土器等）が分布する薩摩地域と「焼塩土器」が多く出土する大隅地域とに区分ができるかもしれない。

九州各国における土器そのものの比較（胎土・焼成・色調などの違いの有無）、自然釉付着の焼塩土器の傾向などについて検討が必要である。また、布目についても絹か麻かという指摘はまだみられない。そもそも、土器

そのものについて残留塩分などについて分析された例がない。

(3) 遺跡（生産遺跡・消費地遺跡）から

「製塩土器の生産地」や「製塩遺跡」が確認されていない現状では議論に限界がある。そもそも、薩摩・大隅では焼塩土器の生産はなされていない可能性も考えられる。

ただし、生産の場として考えられる海浜が、汀線変化や砂丘化などによって当時の状況を残していない場合も多いと考えられる。今後は海浜などにも注意を払うべきである。

(4) 文献から

研究例の蓄積の多い地域の例などを参照しての再検討が必要である。

特に、塩の生産・運搬には注意を払うべきではないかと考える。

以上のようにおよそ4つの課題としてまとめることができた。今後はこれらの課題を踏まえた調査が必要である。

「塩」は生活に必要なものの一つであるが、必要という意味では塩以外にも様々なものがある。

生活が営まれる「集落」の中では、煮炊き・生産活動（農耕・牧畜など）・加工（鍛冶・木工）に関する様々な活動が行われていたはずである。これらの遺構・遺物について有機的にみていくことで、より当時の生活に接近することができるのではないかと考える。

今後は、容易ではないかもしれないが、上記の視点を交えたうえでの調査・研究を行うべきではなかろうか¹³⁾。

本稿を起こすにあたって、以下の方々にお世話になった。ご芳名を記して、感謝の意を表したい。

池畑耕一 岩永勇亮 黒川忠広 重久淳一 篠宮正
関明恵 玉利浩実 堂込秀人 徳永愛雄 永濱功治
中村和美 西野正勝 廣栄次 松田朝由 真邊彩
宮下貴浩 宗岡克英 前迫亮一 湯場崎辰巳

【 註 】

1)「古代」の定義には様々なものがあるが、ここで取り扱う「古代」は、おおむね8世紀から10世紀を対象とする。

2)「焼塩土器」については、岩本正二と大久保哲也が適切にまとめているので、以下に引用する。

「製塩土器とは別に、煮沸・煮熬し結晶化した塩を別の土器に詰め直し、再び熱を加え、塩の潮解性（塩がべとつく）を主になくするための焼塩専用土器が存在する。これまで紹介した製塩土器は、主には煮沸・煮熬土器として使用されたと考えら

れているが、焼塩専用土器の存在が近年確認されるようになった。」（岩本・大久保 2003）

3)全国的な研究については、近藤義郎（近藤 1980）や奈文研（奈良文化財研究所 2013）によるものなどがあるが、紙幅の都合もあるので今回は触れない。

これらの研究史の多くについては、岸本雅敏がまとめている（岸本 2005）ので参照されたい。

4)近世の「焼塩壺」とは、類似する部分があるが、直接火にかけるか否かが最も異なる点である。

5)鹿児島県内における古代以前の製塩土器・焼塩土器に関しては、古墳時代のものがある。製塩土器に関して、従来から萩原遺跡（始良市）・辻堂原遺跡（日置市）・永野原遺跡（肝付町）における出土例が指摘されている（近藤 1984 など）。これに加えて近年になり、神領 10 号墳からの出土が確認されている。この製塩土器に関しては、在地産ではなく大阪湾岸製であり、古墳時代中期に「塩を入れたまま」で現地へ運ばれ、古墳祭祀に用いられたと推定されている（藤本 2013）。

いずれも、生産遺跡での出土例ではないことが注目される。

また、現在のところ弥生時代以前のもの確認されていない。

6)この場合の塩は「堅塩」と呼ばれる「黒色の固形塩」であり、現代の精製された「白色の粉状の塩」とは大きくイメージが異なる。

7)志布志市・曾於郡大崎町・曾於市の一部（末吉町・財部町・大隅町月野）を旧日向国として扱った。

8)筆者の記憶では、東九州自動車道関連の発掘調査が本格化する以前は、県内においては焼塩土器の良好な遺物は極めて少なかったと思う。高篠遺跡をはじめとする曾於市周辺の遺跡のほとんどが、良好な焼塩土器出土地であり、そのほとんどが「旧日向国」であることも無関係ではないのではなかろうか。

9)本来であれば、ここで日向国【宮崎県】全体における焼塩土器の出土状況についてもおさえるべきであろうが、今回はそこまで行っていない。今後の課題としたい。なお、日向国の「調」は『延喜式』巻24 主計寮上巻では、「生糸・麻布・薄鮑・鯉」となっており、「塩」は入っていない。

10)特に、高篠遺跡において、焼成に関わる遺構に伴って大量の焼塩土器が出土している。また、本遺跡では「牧」と墨書された土器の出土から、牧の可能性が指摘されている。ただし、牧の実像については、全国的な視点でも明らかでない部分が多い。高篠遺跡では建物跡が多く検出されており、その配置から「官衙的」であるということが指摘されているが牧の類例が少ない現状では評価が難しい。今後の課題といえよう。

また、「牧」と塩との関わりがいわれるのには『（養老）律令』中の「厩牧令第23」において、馬への飼料の中に「塩」が記載されていることが根拠である。以下に引用する（黒板・国史大系編修会編 1972）。

「凡厩。細馬一疋。中馬二疋。騫馬三疋。各給丁一人。穫丁每馬一人。日給細馬。粟一升。稻三升。豆二升。塩二勺。中馬。稻若豆二升。塩一勺。」

現代語訳:「厩(うまや)では、細馬(さいめ)(=上馬)1頭、中馬(ちゅうめ)2頭、驚馬(ぬめ)(=下馬)3頭に、それぞれ丁(馬丁:ばてい。馬の世話をする人)を1人割りあてること。穫丁(かくちょう:飼料を採る要員)は馬ごとに1人割りあてること。毎日、細馬には、粟1升、稲(=半糠米)3升、豆(=大豆)2升、塩2勺を与えること。中馬には、稲もしくは豆2升、塩1勺を与えること。」

※勺=1合の1/10。1勺は約18ml。

なお、驚馬に関しては塩の記載はない。

11) 筆者もかつて触れたことがあるが、現在の汀線(海岸線・河口など)は有史以来全く同じ場所であったわけではなかった(千田1974・日下1995・高橋学1995・斉藤直子2004・高橋一樹2008・村上勇2009・上床真2011aなど)。環境変化による海水面変化のみでなく、中世以降の埋め立てや、飛砂による砂丘形成などによる汀線の変化(遺跡立地研究会1998・大庭2008など)も考慮する必要がある。特に、薩摩半島吹上砂丘に関しては、弥生時代以降の砂丘発達が顕著であり、有史以降においても大きな変化があることが指摘されている(森脇広2001・福永2010ほか)。このような状況では、海岸付近の生業・産業についても解明が困難であることは容易に想像される。

12) 時代は異なるが、類似の指摘を早野浩二が行っている(早野2010)。「土器製塩作業域、他種生産域、居住域、墓域・祭祀域等は、遺跡内において明確には分離しない」という事実は、製塩集団は「農耕集団から分離した漁撈・海運等を含めた複合的な臨海諸活動集団」であったことを示唆するという指摘である。

13) H26及びH27には、「東日本大震災の復旧・復興に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る派遣専門職員」として、岩手県沿岸部における復興調査にあたった。沿岸部における調査ということもあり、出土遺物の中に製塩土器が含まれることも少なくない。

特に、東北では縄文時代から製塩土器が使用されていることが明らかになっているが、西日本ではどうさかのぼっても弥生時代以降であるので、東西の違いや日本列島の広さに驚嘆している。ただし、西日本においても、縄文時代の製塩遺跡や土器が発見される可能性も皆無ではないので、鹿児島県内においても今後調査にあたる際には注意を払う必要はあると考える。

【参考文献・報告書】

- 始良町教育委員会1978『萩原遺跡』始良町発掘調査報告書(2)
池畑耕一1983「出土遺物からみた古代の薩摩・大隅」『大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
池畑耕一1986「指宿地方における古代の郡界と郡家の位置」『指宿史談』第5号30周年記念(Ⅰ) 指宿史談会
池畑耕一1991「英祢駅考」『三島格会長古稀記念論集 交流の考古学』(『肥後考古』第8号) 肥後考古学会
池畑耕一1993「焼塩壺と駅—阿久根市辻堂遺跡の性格—」『阿中考古』3号 阿中考古同人
池畑耕一1994「鹿児島県・宮崎県・沖縄県」近藤義郎編『日

- 本土器製塩研究』青木書店
池畑耕一2006「種々の生産遺跡」『先史・古代の鹿児島 通史編』鹿児島県教育委員会
石部正志1985「原始・古代の土器製塩」『塩業・漁業』講座・日本技術の社会史2 日本評論社
石部正志1988「海の生産(総論)」『考古学ジャーナル』No.298 特集・塩の生産 ニュー・サイエンス社
遺跡立地研究会1998『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
岩本正二1988「奈良・平安時代における塩生産の諸問題—研究史的整理と若干の問題点」『考古学ジャーナル』No.298 特集・塩の生産 ニュー・サイエンス社
岩本正二・大久保哲也2003『備讃瀬戸の土器製塩』(吉備考古ライブラリィ15) 吉備人出版
牛ノ浜修2002「鞆羽口県内出土一覧表」『犬ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(50)
上床真2000「薩摩・大隅の古代の堅穴遺構—堅穴式住居の終末に関する一考察—」『Fragments』第2号 さくら研究会
上床真2006「薩摩・大隅の掘立柱建物に関する若干の検討—古代掘立柱建物の集成・分類を中心として—」『Archaeology from the South』鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集 鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会
上床真2007「カマド・鍛冶関連の遺構・遺物について」『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)
上床真2009「鹿児島県の古代に関する覚え書き —ここ数年の成果を中心として—」『南の縄文・地域文化論考 南九州縄文通信』No.20 新東晃—代表選歴記念論文集 南九州縄文研究会
上床真2011a「薩摩川内市湯田町の中世に関する検討—歴史学・考古学・地理学的な視点から—」『新薩摩学 中世薩摩の雄 渋谷氏』鹿児島純心大学国際文化研究センター新薩摩学シリーズ8 南方新社
上床真2011b「鹿児島県内の井戸状遺構に関する集成と考察」『鹿児島地域史研究』No.7 鹿児島地域史研究会
上床真2015「薩摩・大隅における古代堅穴遺構の再検討」『Archaeology from the South』Ⅲ 本田道輝先生退職記念論文集 本田道輝先生退職記念事業会
大庭康時2008「考古学から見た博多の展開」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市博多を掘る』海鳥社
小田和利1996「製塩土器からみた律令期集落の様相」『九州歴史資料館 研究論集』21 九州歴史資料館
鹿児島県教育委員会1975『薩摩国府跡・国分寺跡』
鹿児島県教育委員会1977「西免・杵場・山神・曲迫・桑ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(7)
鹿児島県教育委員会1981「加栗山遺跡」『鹿児島県教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)

鹿児島県教育委員会 1982「山崎 B 遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(18)

鹿児島県教育委員会 1982「小瀬戸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(19)

鹿児島県教育委員会 1983「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(28)

鹿児島県教育委員会 1984「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報―昭和 58 年度―」『鹿児島県教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書』(29)

鹿児島県教育委員会 1985「成岡遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(35)

鹿児島県教育委員会 1992「榎崎 A 遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(63)

鹿児島県教育委員会 1991「小中原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(57)

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2014「堀之内遺跡」『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』(2)

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015「天神段遺跡 1 弥生時代～近世編」『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』(3)

鹿児島県住宅供給公社 1981『小田遺跡（隼人塚団地 B 地点）』

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993「榎崎 B 遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(4)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993「竹牟礼遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(5)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(39)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「市ノ原遺跡（第 1 地点）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(49)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「犬ヶ原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(50)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「森・白金原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(55)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(58)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「東免遺跡・曲迫遺跡・山神遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(64)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「後迫遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(66)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「上ノ平遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(70)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004「九養岡・踊場・高篠遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(71)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「下永迫 A 遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(72)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「中野西遺跡・松山田西遺跡（根木原遺跡 A 地点）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(76)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004「大坪遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(79)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004「大島遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(80)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「桐木・耳取遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(91)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004「永迫平遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(93)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006「仁田尾中 A・B 遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(110)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006「諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(112)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006「安茶ヶ原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(118)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「持鉢松遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(120)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008「上水流遺跡」 2『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(121)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「唐尾遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡・高古塚遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(127)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「市ノ原遺跡（第 2 地点・第 4 地点）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(130)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009「上水流遺跡」 3『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(136)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009「市ノ原遺跡第 3 地点」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(140)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009「小中原遺跡・市菌遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(142)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「渡畑遺跡」 2『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(159)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「下鶴遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(163)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011「上新田遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(166)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011「芝原遺跡 3」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(170)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013「川上城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(176)

加世田市教育委員会 1980「上ノ城跡」『加世田市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)

加世田市教育委員会 1985「上加世田遺跡―1」『加世田市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)

鎌田洋昭・中摩浩太郎・渡部徹也 2009『橋牟礼川遺跡火山灰に埋もれた隼人の古代集落』日本の遺跡 40 同成社

蒲生町教育委員会 1995「竹牟礼遺跡」『蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)

川口雅之 2008「鹿児島県における古代・中世鉄器の基礎的研究」愛媛大学法文学部考古学研究室編『下條信行先生愛媛大学退任記念献呈論文集 地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念事業会

川又清明 2014「総論 塩づくりの考古学―常陸の塩づくり―」『月刊考古学ジャーナル』11月号(通巻No.663) ニュー・サイエンス社

岸本雅敏 1996「古代の塩の意義」大塚初重・白石太一郎・西谷正・町田章編『考古学による日本歴史』2 産業Ⅰ(狩猟・漁業・農業) 雄山閣

岸本雅敏 2005 特論「塩」上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦編『暮らしと生業』列島の古代史ひと・もの・こと2 岩波書店

金峰町教育委員会 2003「鮎受・弥十山・針原・上水流C・D・大迫田遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(14)

日下雅義 1995「古代の環境と開発」日下雅義編『古代の環境と考古学』古今書院

黒板勝美・国史大系編修会編 1972『新訂増補 国史大系 律・令義解』吉川弘文館

黒板勝美・国史大系編修会編 1959『新訂増補 国史大系 延喜式 中篇』吉川弘文館

近藤義郎 1980「原始・古代」『日本塩業大系 原始・古代・中世(稿)』日本専売公社(のちに「日本塩業史の考古学的研究」と改題して 近藤義郎 1984『土器製塩の研究』青木書店に再録)

近藤義郎 1984『土器製塩の研究』青木書店

近藤義郎 1994「序章 一概観と問題一」近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店

斉藤直子 2004「自然環境と地名―海岸線を事例として―」『地名を歩く』別冊歴史読本 81 新人物往来社

坂本信太郎 1979『「延喜式」から見た諸国の産物表』『早稲田商学』281号 早稲田商学同攻会

坂本信太郎 1980『「延喜式」から見た諸国の産物表(承前)』『早稲田商学』284号 早稲田商学同攻会

佐々木義則 2014「古代常陸国の塩づくりとその流通」『月刊考古学ジャーナル』11月号(通巻No.663) ニュー・サイエンス社

里山勇廣 1982「奄美諸島発見の内器内に布目痕を持つ土器について―表面採取資料を中心に―」『南島 その歴史と文化』4 第一書房

佐野隆 2008「小笠原牧の考古学」入間田宣夫・谷口一夫編『牧の考古学』高志書院

潮見浩 2000『図解技術の考古学〔改訂版〕』有斐閣

柴田博子 2008「古代南九州の牧と馬牛」入間田宣夫・谷口一夫編『牧の考古学』高志書院

篠崎譲治 2010『馬小屋の考古学』高志書院

千田稔 1974『埋れた港』学生社(後に 千田稔 2001『埋れた港』小学館ライブラリー 小学館 として加筆修正を行って再刊。ここではこちらを参考とした。)

高井佳弘 2000「馬のいる風景 ―日本古代における馬の飼育の景観復元―」『研究紀要』18 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

高島英之 2008「上野国の牧」入間田宣夫・谷口一夫編『牧の考古学』高志書院

高橋一樹 2008「中世の内海世界と生業」『生業からみる日本史』吉川弘文館

高橋学 1995「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」日下雅義編『古代の環境と考古学』古今書院

谷口満編 2015「シンポジウム報告 日中比較塩業史研究 ―その可能性を展望する―」『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号 東北学院大学学術研究会

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編 2013『第16回古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所研究報告第12冊 クバプロ

橋本壽夫 2009『塩の事典』東京堂出版

羽鳥幸一 2013「瀬戸内の製塩と流通について ―一周防国を中心に堅塩と煎塩の様相をみる―」独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編『第16回古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所研究報告第12冊 クバプロ

馬場基 2013「文献資料からみた古代の塩」独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編『第16回古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所研究報告第12冊 クバプロ

早野浩二 2010「製塩遺跡の空間構成についての基礎的研究」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム

東和幸 2012「境界に位置した南九州 ―飛鳥時代から平安時代―」『遺跡から見える鹿児島県の歴史と文化』鹿児島県立埋蔵文化財センター設立20周年記念フォーラム資料集

平田信芳 1980「薩摩と塩」『隼人文化』第八号 隼人文化研究会(後に 隼人文化研究会編 1994『隼人族の生活と文化』雄山閣 に再録)

平島裕正 1973『塩』ものと人間の文化史7 法政大学出版局

廣栄次 2013「外面に格子目文タタキを施す土師器について」『山口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(179)

廣山堯道 1983『日本製塩技術史の研究』雄山閣

廣山堯道 1990『塩の日本史』雄山閣

廣山堯道・廣山謙介 2003『古代日本の塩』雄山閣

福永裕暁 2010「吹上浜砂丘遺跡の歴史地理的特性―旧万之瀬

川低地周辺のランドスケープ構築に向けて― 輝津館企画
展図録論集『順風往来―薩摩をめぐる東アジア海域交流史』
南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

福山町教育委員会 1994「中尾立遺跡」『福山町埋蔵文化財発掘
調査報告書』(2)

藤本貴仁 2013「九州における土器製塩の波及と製塩土器の運
搬」第16回九州前方後円墳研究会熊本大会発表要旨集『古
墳時代の地域間交流 1』九州前方後円墳研究会

文化庁記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究
所編 2010『発掘調査の手引き』―集落遺跡発掘編― 同成
社

松崎元樹 2008「武蔵国多摩郡域の牧をさぐる」入間田宣夫・
谷口一夫編『牧の考古学』高志書院

村上勇 2009「パリア海退が中世地域社会に与えた影響につい
て」『西国城館論叢』I・河瀬正利先生追悼論集 中国・四
国地区城館調査検討会

森泰通 2010「東海地方における古代土器製塩覚え書き 2009―
内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために―」『東
海土器製塩研究』考古学フォーラム

森田勉 1983「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文
館

森脇広 2001「南部九州」町田洋ほか編『日本の地形7 九州・
南西諸島』東京大学出版会

山梨県考古学協会 編 2000 山梨県考古学協会 2000 年度研究集
会『古代の牧と考古学』資料集

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第9号

発行年月 2016年12月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
